

# 北の譜

聞き手 奥津義広記者(北海道新聞社)

## ⑦<交響譚詩>

### 聖火祭の縁で結婚

結婚したのは昭和十六年四月、家内(旧姓勇崎愛子※ママ→愛子は舞踊家としての名であり、本名はアイである)とは、前の年の聖火祭の縁です。というのも、家内はそのころ札幌で舞踊研究所を主宰してまして、聖火祭の踊りもその舞踊団がやりました。それで練習の時に何度か会い、まわりの人たちからも「どうだ、どうだ」と勧められまして。当時の新聞に「聖火祭に結ぶ恋」なんて見出しで紹介されたのを覚えております。

家内は、ドイツのマリー・ウィーグマンが始めたノイエ・タンツ(新舞踊の意)を日本に持ち込んだ舞踊家江口隆哉の直系の弟子で、東京に四、五年いてから札幌に戻り、舞踊研究所をやっておったんです。結婚後も続けてましたから、北海道にはそのころのお弟子さんがまだたくさんいるんですよ。

結婚して間もなく太平洋戦争が始まりました。私は相変わらず北大演習林事務所に勤めてましたが、ある時、英国のモスキートという飛行機が中国雲南省の昆明に落ちた。ところがこの飛行機、ラジオ・ロケーターに捕そくされないようにリベットを使わず、機体はのりをつけてある、というんですね。木材の接着に興味を持っていたので、この話を何かに書いたところ、宮内省の目にとまったらしい。豊平の皇室林野局林業試験場にこの話が出て、そこで飛行機用の強化木の研究をすることになりました。

真空の中で木材にホルマリンを注入、加熱、圧縮すると、厚さはもとの十分の一ぐらい、それでいて金属より強いものが出来るのです。むろん、ラジオ・ロケーターにはかからない。

以後、戦時科学的研究員として、ずっとこんな研究をしていたのですが、僕みたいなのを研究員にするからでしょうかねえ、そのうち戦争は負けちゃった。

で、戦後になります。終戦から二週間ほどたった八月二十八日、突然ノドから血を吐いてしまった。林業試験場で浴びた放射線障害ということで、一年間、札幌の自宅で静養を余儀なくされました。

### 「音楽で生活」と上京

ところがそのころ東京の知り合いから「オーケストラ向けの曲が書けるなら、映画の仕事をやったらどうか」と誘われた。体も良くなったし、このまま北海道にいるより音楽で生活出来るなら、思い切って東京に出る決心をしたわけです。

家内と長女の家族三人で札幌を出発したのは二十一年八月十五日です。その朝、ラジオから私の「交響譚(たん)詩」(昭和十八年)が流れてきた。縁起がいいのか悪いのか。というのはこの曲、二つ上の兄貴(勲)の弔い(たがひ)に書いたものなんです。「お前もすぐ死ぬぞ」といわれているような気が

する一方で、「しっかりやれ」と兄貴が励ましてくれてるような感じがありましてね。

兄貴は軍事用の蛍光塗料の研究をやってましたが、これまた放射線を受け、血を吐いて死んじゃったんです。昭和十六年だったと思います。それでその弔いの意を込めて、二年ほどかかって書いたのですが、「譚詩」というのはいわばバラード、舞踊と音楽が混然一体となっていた昔の形態です。



▲札幌時代(詳細年代不明)

### 文部大臣賞を受賞

ちょうどビクターの管弦楽曲募集に当たったので応募したら一位、SPレコードになり文部大臣賞をもらいました。

ともあれ、そのラジオに送られるようにして、東京へは着いた。ところが、東京には入れないんですよ。焼け野原で食糧、住宅事情ともどん底の時代、地方からの転入制限をしていたのですね。それでやむなく、日光の奥の久次良に友人の古い家が空いていたので、ひとまずそこへ落ち着きました。ちょうど御用邸の上です。八月十七、八日ごろでしたかね。

昭和 60 年 4 月 4 日(木)夕刊

木曜ふらざ